

明恵伝諸本の「母」をめぐる

古田雅憲

はじめに

治承四年正月八日のこと、明恵は八歳にして母を喪つた。さまざまな明恵伝に等しく記されるところだが、語り部たちはみなその顛末について多く語らない。ただ「治承四年庚子正月八日悲母逝去」（上山勘太郎氏蔵本「高山寺明恵上人行状」・上巻³張）などというばかりである。後に触れるが、明恵その人は母を強く思慕したし、彼の高弟たちもそのような祖師の姿を充分に意識していた。だから、早くなくなつたその人を明恵がどのように意識し、またどのように接しようとしていたのかという話題は、語り部たちにとってはけつして些事ではなかつたはずである。明恵自身が進めた山城善妙寺での活動との関わりにおいて、また、「女人救済」という当代仏教界の論点との関わりにおいて、「母」に関する祖師神話の形成は重要事であつたに違いない。その話題の重要性を踏まえて、「悲母逝去」という淡々

とした表現に向きあいたい。いったい、語り部・弟子たちは「祖師とその母」という話題をどのような心情でもつて伝えているのか。そのような興味から、特に「母・母性・女性」などの話題について、「行状系明恵伝」を中心として整理し、そのうえで明恵自筆の記述やその講述聞書類と比較し、また、いくつかの明恵伝の表現とも対照してみた。その作業から知られた、祖師神話形成にかかる語り部たちの差異や、そこに見て取られる「女人救済」をめぐる高山寺仏教圏のありようについて述べたいと思う。²⁾

一 母への想い

明恵の母という人は紀州豪族・湯浅宗重の娘である。多くのことは分からない。ただ「行状」（上山本および施無畏寺本を併せていう）などが伝えるには、彼女は六角堂の万度詣を行つて明恵を授かつた。「我カ後生ヲタスケ仏弟子トシテ尊トカラム子息ヲ給ラム（施無畏寺本・上巻一ウ）」と

一心に祈請し、ある夜の夢に「或人」の「手ヨリ甘子ヲエタリ
(同・上巻2才)」と見てついに明恵を懐妊したというので
ある。行状語り部は、彼女の祈請の趣が「懐妊ノ初ヨリヒ
ソカニ願念ヲ発ス、若男子ナラハ高雄ノ薬師仏ニマイラセ
テ仏弟子トナスヘシ(同・上巻3ウ)」のようにその後も強
く保たれたといひ、だから明恵童名は「薬師」といった
(後に「一郎」と改めた)のだと語り継ぐ。

行状語り部は、母のそのような念願を確かに引き受けよ
うとする明恵の姿を直後に描く。それは父・平重国が四歳
になった明恵に烏帽子を着せてその美男振りを子褒めする
場面である。「形チ美容ナリ、男ニナシテ大臣殿小松内府へ
マイラセン」(施無畏寺本・上巻4才)という父のことばを
耳にして、明恵は縁から飛び降りて自らの容貌を毀損しよ
うとしたという。そのおり「我ヲハ法師ニナサムトコソ云
ニ、美容ナリト云テ男ニナサムト云ニ、カタワツキテ法師
ニナラム」と明恵が心に思ったというが、それは、父に背
いてまで母の念願を引き受けようとする強い意志を示すだ
ろう。先の「ヒソカニ願念ヲ発ス」という懐妊中の念願一
句を思い合わせれば、明恵の行く末について父母の間(あ
るいは重国と湯浅一族との間)で思惑の違いが存したことも
想像されるが、それはともあれ、このあたりの記述は母の
念願を重く受け止める明恵像の造形である。母の想いを引
き受けることが祖師の諸活動において重大な淵源であった、

行状語り部はそのように理解していたと思われる。

◇

◇

その母は明恵を遺して亡くなるが、彼女に寄せる明恵の
想いについて、行状語り部はさらに次のように語り継ぐ。

(1) 其後、生年九歳ノトキ、八月ノコロ、高尾山ニノ
ホル、親類ニハナル、事カナシク覚エテ、泣々馬ニノ
リテ登山ス……我親類ノ後生タスクラムカタメニ法師
ニナシテ尊トカラムトス……今ハ法師ナリテ尊ク行テ
親類ヨリ始メテミナ一切衆生ヲ導引ムト思フ願ヲフコ
ス(施無畏寺本・上巻6オウウ)

親代わりに育ててくれた湯浅の人々から離れて、高雄神
護寺に明恵が赴こうとする場面である。母の念願はこうし
て成就の契機を得た。そしてその想いを完遂するために、
明恵は良き法師とならねばならず、さらに一切衆生を導く
ために尊く修行することを誓願しなければならなかった、
と伝えるのである。祖師の淵源はその母への想いにあり、
そこから一切衆生救済の念願も生じた、行状語り部はその
ように理解していた。だからそこには、亡妻を追うように
同年秋に戦死してしまつた父重国を追善する心情も矛盾な
く同化して語られることになる。

(2) 父母ニヤクレタルコト日夜朝暮ニ思ヒ忘ル時ナシ、
犬鳥ヲ見ルマテモ我父母ニテヤアラムト思ニムツマシ
クヲモク覚テ……若父母三途ニ生レテ重苦ヲモウケム、

是ヲタスケサルサキニ……(施無畏寺本・上巻7オ)

また、そのような語りの内容に呼応して、明恵十二三歳の出来事・高雄出奔(未遂)の顛末について、行状語り部は次のように語っている。

(3) 一、十二三歳ノ時、高尾ヲ出ムト思フ事アリキ、
而ニ父母我ヲハ薬師仏ニマイラセタリ、暇ヲ申テ後ニ
出ツヘシト思フ(施無畏寺本・上巻10オ)

高雄出奔を思い立ちながら、亡父母の念願に引かされてためらいを見せる明恵が描かれる。ここで山を下りようとした理由は明らかでないが、諸本によればいつその善知識を得んがため遁世を志したということのようである。後日の夢告によりこの出奔は中止されるが、ここでも、父母への想いが明恵の言動に重く影響したのだという行状語り部の理解がうかがわれよう。



ところで『梅尾説戒日記』⁽⁴⁾とは明恵説戒の聞き書きだが、そこに「漢土ニ靈育トイフ人御マス……生年十二歳ニシテシキリニ山林ニ道ヲ行セムト云フ、父母コレヲユルサス……(9オ)」という記述が見える。いうまでもなく「行状」高雄出奔の記述と似る。明恵が自らの説戒談話にその伝承を引用する心象と、先の高雄出奔にまつわる行状語り部の理解とは、やはりどこかで響きあっているよう。明恵その人の慕情も、行状語り部ら側近の人々が理解したと

ころとおよそ違わなかったのだろう。

同書には明恵自身が亡父母追善の孝養を称揚する記述も残る。

(4) 始ノ衆會ノ鐘ハ一切仏菩薩諸天聖衆乃至受戒者ノ
父母ノ畜生餓鬼トナリテ山林曠野ニ居スルマテモミナ
此鐘ノ声ヲ聞テ道場ニ来臨スル也、コレ息受戒ノ善
根ニ引ル身故也(11オ〜ウ)

子の善根が父母の後世を弔うという説戒を明恵は弟子たちに親しく語っていたのである。また高山寺に伝わる某の「夢記」に次のような記述が見える。

(5) 建曆三年正月廿五日……夢想ニ云ク、或所ニ参ル、
一閑所有リ、多聞吉祥両天ヲ安ス……戸ヲ去リテ幾モ
非スシテ吉祥天坐ス、動来テ予ノ膝ヲ枕トシテ天ヲ仰
キテ臥シ給フ、歡喜ノ思ヲ成シテ心願ヲ述ヘテ言フ、
予数願有リ、一ハ母ノ孝養ヲ致サム、一ハ三宝ヲ供養
セム、一ハ衆生ヲ利益セム……此レ未曾有ノ吉夢、不
思議ノ示現ナリ(高山寺藏・某の夢記)

この「吉祥天を膝枕して、母への孝養を念願した」夢の記述者は特定できないし、また先の『梅尾説戒日記』の記述などと直接に関わるものではあるまい。が、折しも建曆三年とは明恵四十一歳、高山寺の活発な展開期である。この某「夢記」の記述は、やはり明恵周辺の雰囲気の色濃く反映しているとみてよいだろう。遺された子として亡父母

を追慕する祖師明恵のありように、大いに感化された弟子の一人がいたということではあろう。

また高山寺藏明恵自筆『夢記』によれば、明恵自身、夢に「師文覚が死人の頭を持って現れ、明恵母方の祖母の後世を弔うべしという」（建保七年二月七月の某日）とか、その後の夢に「常円房（明恵姉妹）とともに尼形の実母が来臨する」（建保七年七月某日か）とか、また別の夢に「南尾御前（明恵伯母）が現れ、仏を作りたまえと懇願する」（承久二年五月二十日）といった経験に与っている。

これらの記述は、自らの活動の淵源に亡くなった母への想いが強く存していることを明恵が意識しており、そしてまた、明恵周辺の人々もそれをよく理解していたことを示唆するだろう。行状語り部が、祖師像を造形するにあたって、その母への強い思慕を踏まえて語ろうとつとめるのは道理である。「修行」が祖師足跡を追体験することであつてみれば、祖師の亡母思慕を丁寧になぞろうという行状語り部の意志は、誠実の弟子として不可欠の所為だからである。

二 亡母追想の昇華

が、母に拘泥する祖師像は、祖師神話として必要以上に称揚されるべき話題でもなかつたろう。行状語り部はついで明恵と仏眼仏母尊の出会いを描き、亡母追想の宗教的昇

華を語り伝えようとする。つまり、彼の理解では、母への拘泥は祖師像の重要な淵源の一つではあつても、そこのみ留まるのは、やはり修行半ばの過渡的な相とされたのだろう。冒頭「悲母逝去」という淡白な表現も、そのような理解の一環ということか。

行状語り部はまず次のようなことを語り、祖師が次の段階の高みに登りつつあることを伝えようとする。

(6) 父母ニヨクル、恨ミ、仏ノ御事ニソムレハ物ノカスニアラサリケリ（施無畏寺本・上巻8ウ）

亡父母への思いが強調された後にこそ有意の一文である。前段を踏まえて、その思いのたけよりも、ということになる。母への個人的な思いが、祖師明恵の個人的・宗教者の成長にしたがって、仏に向かつて昇華していく過程を描こうとする意図を予感することができる。

ついで「然ハ仏ニラクレ奉ル事ノカナシミニカヘテ、父母類親ノ事ハ次ニナリニキ、其後、慈父ニ捨ラレ奉テ滅後ニ生テ、如来ヲミ奉ラサルウラミ、片時モワスレス、其心弥相続ス云々（施無畏寺本・上巻9オ）」ともいう。また別に「釈尊ハ我等カ慈父ナリ（同・上巻8オ）」というから、亡父母への思いが仏へのそれへと昇華していく祖師心境を描こうとする意図をうかがうことができる。

◇
◇
ついで行状語り部は仏眼仏母尊に話を及ぼす。この条

彼は実に多くのことばを重ねており、丁寧な叙述を心懸けようとした心情が知られる。

(7) 十九歳ノ時金剛界授ス、其後仏眼ヲ本尊トシテ恒ニ仏眼ノ法ヲ修スルヲ業トス……カノ修中、好相并ニ夢想等種々不思議ノ奇瑞多シ(施無畏寺本・上巻22オ)

(8) 一心ニ仏眼ノ明ヲ誦ス、夢ニ見ル、天童殊勝奇麗ノ宝ノコシニノセテカキアルキテ、仏眼如来々々々々ト云、我ステニ仏眼トナレリト思フ云々(同・上巻22ウ)

(9) 或時夢ニ一ノ荒舎アリ、ソノ下ヲ見レハ无量ノ蛇蝎悪虫等アリ、法花ノ譬喩品所説ノコトシ、仏眼如来心ニ思フ我母ナリニイタカレ奉テ門ヲ出テ其怖畏ヲ免レヌト見ル云々、或時ハ夢ニ馬ニ乗テ險路ヲ行ニ、仏眼如来、指繩ヲ引テ先導ス云々、或時ハ仏眼ノ御懷ニイタカレ奉テ常養育セラレ奉ムト見云々(同・上巻22ウ)

(10) 或時ハ修中ニ仏眼尊親形ヲ顕シテ其前ニ現ス(同・上巻24オ)

(11) 又夢ニ明理趣経ヲサツケム云々……夢ニ仏眼如来ヨリ一通ノ消息ヲ給、ソノ表書ニ明恵房仏眼トカ、レタリ……如此ノ好相等ハ我生死ヲ出テ成仏ノ位ニイタラムマテ併仏眼尊ノ御加被力ニ依テ成就スヘキ瑞相ナリ(同・上巻24ウ)

(12) 仏眼ノ法ヲ修シテ祈請スルニ、開白ノ時白雉現セリ、良久シテウセヌ、此レ延寿ノ先兆ナリ(同・上巻

26オ)

明恵が金剛界曼荼羅を学んだ十九歳の日から、仏眼仏母尊は夢に現にさまざまに顕現したというのである。彼の祈請に応じて奇瑞を生じたり、またその修行の艱難を導き、また不吉の事態から守りなどする。そして、そのような親密から、明恵は仏眼仏母尊を心中に「母」とイメージし、また、ほとんどそれと一体でさえあると観じていたというのである。あたかも、仏眼仏母尊を媒介として祖師明恵は実母への拘泥を昇華させ、それを自らのうちにも存在する母性として再発見したと語っているように見える。行状語り部は、そのような仏眼仏母尊への観想と讃仰のうちについてに仏菓を得ることができると確信するに至った祖師像を紡ぎだしているのである。亡母供養の個人的念願が、仏眼を媒介として、衆生済度の実現へと昇華していく過程を描こうとしているといってもよいだろう。

◇

◇

行状語り部のそのような祖師像造形は、ここでもおおよそ明恵その人のありように合致していたろう。それは、明恵が高山寺蔵「仏眼仏母尊画像」に寄せた文言、「モロトモニアアハレトヲホセワ仏ヨキミヨリホカニシル人モナシノ无耳法師之母御前也ノ南無仏母哀愍我生々世々不暫離ノ南無母御前々々々ノ南無母御前々々々ノ釈迦如来滅後遺法御愛子成弁紀州山中乞食敬白」に明白であろう。

また『真聞集』⁽⁶⁾には次のような記述が残っている。明恵がその講述などにおいて仏眼のことを弟子たちに親しく語っていた様子がうかがわれる。

(13) 仏眼梅尾御口伝五眼印言 自身仏母尊ト成ル……入我々入ノ時ハ我仏母尊ト為テ、我カ下ニ一切悪心怨憎ノ類ヲ布クト觀スル也(三22ウ〜24ウ)

(14) 一、仏眼法感応事 先年多日仏眼、之ヲ行ハシム……本尊画像ノ左右ノ脇ヨリ螺髮形ノ仏一方ヨリ三體ツ、出生シテ真言ヲ誦ス(本16オ)

また高山寺藏明恵自筆『夢記』(第二篇)には次のような記述も見える。

(15) 建久七年八月、九月、夢ニ金色ノ大孔雀王有リ……鳥、此ノ偈ヲ説キ已リシ時、成弁ノ手ニ二卷ノ經ヲ持ツ、一卷ノ外題ニハ仏眼如来トカキ、一卷ノ外題ニハ釈迦如来トカケリ、彼ノ孔雀ヨリ此ノ經ヲ得ル也……歡喜ノ心熾盛也

孔雀王から仏眼如来、釈迦如来の經を拜受したという夢だが、これに関連して『上人之事』⁽⁷⁾に次のような記述がある。先の夢そのものではないにせよ、それに類することがらを明恵が親しく弟子たちに語っていたことも予想される。

(16) 壯年ノ時、智恵ヲ好マムト思フ間ニ、仏眼法ヲ行ヒテ之ヲ祈請ス、行法ノ間ニ壇中ニ声ヲ出ツ、孔雀經ヲ読ム、能々之ヲ聞ケハ壇中也……不思議ノ思ニ住、是

レ大成就ノ相也(6オ)

行状語り部は、仏眼仏母尊との出会いを契機として、母への拘泥を昇華させていく祖師明恵のさまを、丁寧に辿りつつ語っているのである。

◇
ついで行状語り部は、仏眼仏母尊を「耳そぎ」の場面で語る。

(17) 聖術ココニツキタリ、如此衆生法理ニウトク、我等如来ノ本意ニ背ケル事ヲ思ツツクレハ、髮ヲソレ頭モソノシルシトスルニタラス、此心ヲサヘカタキニヨリテ、弥形ヲヤツシテ人間ヲ辞シ、志ヲ堅シテ如来ノアトヲフマムコトヲ思フ、然ニ眼ヲクシラハ聖教ヲミサル歎キアリ、鼻ヲキラハス、ハナタリテ聖教ヲケカサン、手ヲキラハ印ヲ結ハムニ煩ヒアラム、耳ハキルトイフトモキコヘサルヘキニアラス、然モ形ヲヤフルニタヨリアリ、仍テ大願ヲ立テ志ヲカタクシテ、仏眼如来ノ御前ニシテ耳ヲカラケテ仏壇ノ足ニ結ヒツケテ、刀ヲ取テ右耳ヲ截ル……(施無畏寺本・上卷34ウ〜35ウ)

後段、耳の痛みに耐えながら一心に読経していると、そこに金身の文殊菩薩が金獅子に座して顕現する奇跡が語られる(施無畏寺本・上卷38ウ)。この「耳そぎ」から「文殊顕現」にかかる体験は明恵にとって生涯にわたって実にならぬ大なる意味を有したらしく、晩年、弟子達を前にして感動を

もって語られた旨の記録が『却廢忘記』⁽⁶⁾に見える(上20ウ)。また嘉禎二年に喜海がたてた東白上の遺跡の塔婆の銘に「建久の比、蟄居修練の間、文殊、空中に浮び現形の処」とあることが知られる。その出来事が、明恵にとつて意味深かつただけでなく、語り部たちにとつてもそれを語り伝えることがきわめて重要なものであつたことがうかがわれる。

そのような場面に仏眼仏母尊が描かれるのは、一連の仏眼仏母尊との親密を述べるそれまでの文脈を踏まえては、決して偶然ではないだろう。仏眼に「母」を観想し、それを契機として自らの内にも存する母性を発見する過程を描いたのち、耳をそぐ明恵を見守る本尊としてこの重要な場面に語るのであれば、その心象にはやはり然るべき意図があると見るのがよい。論者は、この「耳そぎ」譚を、高山寺仏教圏が「女人救済」を自らの活動のうちに位置づけるための、一つの象徴であると考えている。

◇

行状語り部は祖師が耳をそぐ理由に触れて、自らの形態を毀損することで虚飾を排し、ただ釈迦の本意に忠実であることの真心に徹するためと明快にいう。「耳」も、その後の修行にとつてなるべく不都合がないように、という観点で選ばれたとする。が、彼が語らぬことながら、そのように容貌を實際に毀損することが当代の文脈のなかで孕ん

でいた含意は踏まえねばなるまい。

周知のように、「耳そぎ」は、火印刑、鼻斬り刑、指斬り刑などとともに、一般庶民たる凡下に対する中世肉刑の一つであつた。御成敗式目第十五条の「謀書の罪科」などにも明らかである。それらは総じて、詐欺罪を犯した者への天罰として、顔面等を損傷させて異形とする刑罰である。その心象は、ハンセン病患者ら重度の身障者が神仏に対して欺きをなした罪人と「理解」されたことも関わる。つまり、それらの刑罰は、神仏に背き仏罰を得て永遠に人界を逐われた者というイメージを罪人に付与するという意味の制裁である。

したがって、行状語り部が「耳そぎ」を自ら選択した若い明恵を描くとき、そこに、仏教者としての出発にあつて、神仏に背き仏罰を得て永遠に人界を逐われた者と自らを規定する祖師像が浮かび上がることになる。「永遠に人界を逐われた」とは「非人」のイメージであり、同時に「女人」のそれであることは言うまでもない。つまり、「耳そぎ」譚は、祖師明恵が自らの意志として「非人」となりまた「女人」となつて、永遠に人界から逐われる境涯を好んで引き受けたのだという行状語り部の暗黙の理解を照射しよう。

もつとも、「行状」の文脈では、そのとき明恵は神護寺を後にして紀州白上山中にあつたのである(施無畏寺本・

上巻30才、建久六年秋条。明らかに黒衣をまとう遁世僧「非人」として描かれている。僧侶にとつては寺を離れて遁世すれば「非人」である。が、それは寺に戻れば再び人界に復することができる性質のものであるを思い出す必要がある。つまり、自ら肉体に印を刻むという鮮烈しかも不可逆的な行為こそが、人界を逐われた人々の側に永遠に身を置くという宣言たりうるのである。先に「象徴」と称したのはそのような理解による。

仏眼仏母尊との関わりをいう一連の文脈は、この象徴を経ることにおいて、「母」母性「女人」自分自身」という意識の連関として完結することになる。この条にいたつて、明恵のさまざまな修行・宗教的活動は、自らのためであると同時に、そのまま女人救済であり、亡母供養であり、衆生救済であるということになりうるのである。行状語り部は祖師と仏眼仏母尊の出会いを丁寧になぞること、亡母供養の個人的念願が、仏眼仏母尊を媒介として、衆生の、特に女人の救済という志向へと昇華していく道筋を辿っているのである。そして、それが彼の「修行」でもあつた。このような祖師像を語り継ぐことによつて、高山寺仏教圏の一員たる語り部は、当代仏教界の課題であつた「女人救済」に立ち向かう根柢を手に入れたのであろう。高山寺仏教圏の人々が理解した「祖師とその母」とは、およそ以上のようなものであつたと思う。

三 「行状」にみえる救済譚の特徴

山城善妙寺における諸活動に代表されるような、高山寺仏教圏の「女人救済」とはこのような志向にしたがう活動だつたらう。「行状」に記される物語に、たとえば次に示すように「母子」の話題が表に立つことがあるのも道理である。

(18) 建仁ノ比、殊ニ以テ更発ス時ニ懐妊ノ間也……上人、時々コレヲ加持ス、或夜、彼ノ靈物顕現シテ語りテ云フ、我ハコレ毘舍遮鬼ノ類也、此ノ女ニ著キテ已ニ数年ニ及フ、今年寿限タルニ依リテ、殊ニ来リ著ク也云々……我等去ルト雖モ存命定メテ難カラムカ、上人ノ威力ニ非スハ延寿叶ヒ難シ……但、母若シ命ヲ全クセハ、懐柔ノ子存シ難シ、子若シ安全ナラハ母又存スヘカラス、兩人ノ間、一人ハ給フヘキ也、上人重ネテ云フ、許シ給ハラハ二人共ニ全タカルヘキ也……我等上人ノ坐禪ノ姿ヲ見、読経念誦ノ音ヲ聞クニ……其首骨髄ニ徹リテ、身毛皆堅チ、落涙留マラス……今ヨリ以後、殺生肉食ヲ止ムヘシ、若シ然カラハ何ヲ以テカ食トセム、毎月一両度食物ヲ賜ハラムト欲フ……仍リテ彼等カ為ニ施餓鬼供ヲ修スヘキ由評定アリ、其始メ上人自ラコレヲ修セラルル間、化鳥忽ニ来テ悦豫

ノ気色アリ(上山本・中巻1〜4張)

煩いに苦しむこの女とは湯浅宗光の妻室である。彼女は明恵の物語に於いて重要な役割を果たすが、この条、彼女の煩った大病について行状語り部は次のようにいう。彼女は年来の持病として腹病を病んでいた。懐妊中にも大病を患ったが、それは実は邪鬼の所為であった。祖師明恵の加持を受けて彼の邪鬼が現れて押し問答となり、母か子かどちらかをもらわないと飢えてしまうと邪鬼が嘆く。それに応じて祖師は施餓鬼供養を約定して、ついに邪鬼の帰依を受けて母子の救済を果たしたのである。

この条に仏眼仏母尊の姿は明らかでないが、直後に同人の難産を仏眼法で加持した旨が見えるので、関連しよう。

(19) 月満チテ両三日難産ノ煩ヒ有リ、所生ノ子平安ナリト雖モ、其母絶入り身冷エ息絶ヌ、上人仏眼尊ノ前ニシテ誠心ヲ擬シテ祈請ス(上山本・中巻5張)

また、先の邪鬼帰依について、その瑞兆として「其大如鳥、其色似山鶏」という「化鳥」がたちまち降臨して喜悅の気色を示したという点も注目しておきたい。行状語り部は「華嚴伝中ニ瑞鳥多ク異相ヲ顯ス」と明恵自身が解いたと語り添えるが、そのあたり、別に「真聞集」にも「仏眼法感応事」として近似の話題が見える。

(20) 仏眼法感応事……又先師姉妹出家後法名常田房 病患危急ノ時、彼祈禱シテ此ノ法ヲ修ス、壇ノ中心ニ金鳥

眼前ニ在リ、聖徳太子伝ヲ見ルニ金鳥ハ鳳ノ類ナリ云々、吉瑞ノ相也ト符合セシメ畢リテ彼ノ所労平癒シ了ヌ云々(本17才)

仏眼の加被、母あるいは女人の救済加持、瑞鳥来臨などの話題がそれぞれ深く関連するものとして明恵周辺に取りざたされていたことをうかがうことができるだろう。

◇ ◇

しかしながら、以後の「女人救済」話題に至っては、必ずしも「母」イメージは明確でなくなる。「或る女人の周忌仏事のために華嚴經を書写して齋筵を展べたこと(元久元年正月廿三日、上山本・中巻9張)」、「糸野で大明神講を行つたところ、その家主女人が信心を起こし、そのさまの尋常でなかつたこと(元久元年正月廿九日、上山本・中巻10張)」、「先年出京のおり、美福門前で歌う盲女の詞に感動し、その女人を大に尊んで供養した(上山本・中巻26張)」などのようである。また関連して、「普賢經を誦誦する乞食下僧に、某家下女が布施供養したが、それを見た明恵は、卑賤女身の下に金色色身を感じ得して礼拝した(上山本・中巻25張)」、「仲間の悪口を言い募る女に向かつて、一人の女人が窘めることがあつたが、それを見た明恵は、これこそ才覚というものと感じ入つた(却庵忘記・下1ウ)」などのように、明恵が女人のうちに崇高なものを垣間見るといふ話題がある。それらのなかに「母」の色合いを見出すこ

とは出来ない。このような語り口のなかに、高山寺仏教團の「女人救済」がおよそ定着していった状況を見て取るべきなのだろう。そして、山城善妙寺の諸活動もそのようなところに成り立ったのだろうと思う。

(21) 同秋比、一人比丘尼、大願ヲ起シテ彼ノ山寺ニシテ、十口ノ僧侶ヲ屈シテ四十華嚴經一部如法書写ノ行ヲ始ム、其写功ステニヲハテ上人啓白アリ(貞応元年 条、施無畏寺本・下巻28ウ)

「行状」によって迎えることのできる、高山寺仏教團の、特に「母・母性・女性」といった話題に対する姿勢はおよそ以上のようなところである。

四 「行状」と諸明恵伝の差異

ところで、「行状」よりも後れて成立した諸明恵伝においては、たとえば、行状語り部が実に丁寧に辿った仏眼仏母尊との諸エピソード(7)〜(12)などはまったく語られない。具体的には、興福寺蔵本「梅尾明恵上人伝」(鎌倉末期書写)、高山寺蔵本「梅尾明恵上人物語」(室町期書写)、高山寺蔵本「梅尾明恵上人伝」(慶長一四年の書写識語)、宝永刊本「明恵上人伝記」などのことである。

それに関連して、明恵十二三歳の出来事・高雄出奔の顛末(3)についても同様の差異がある。そこに見られた父

母への想いは、興福寺本「上人伝」、高山寺本「上人物語」、高山寺本「上人伝」、宝永刊本などに見えない。祖師行状に関わる亡父母追慕の重要性は「行状」と対照すれば必ずしも明白でない。たとえば興福寺本は次のようにいう。

(22) 十二歳時思様、真正ノ知識求テ其正路ヲ聞スンハ徒ニ心ノ隙マヲノミ費テ得道ノ益有ルヘカラス……閑ニ閉籠リ修行セント思テ高尾山ヲ出ト思ヒ成ヌ(4才) また「行状」(6)など、亡父母への追慕に比定しながら釈迦に後れた恨みの重さを云うようになる文脈も、諸本に見えない。

それら「上人伝・上人物語」の語り部たちは、「祖師とその母」という話題について、行状語り部よりもずっと淡泊である。彼等の語る祖師明恵は、喪った母への思いを仏眼との出会いを経て昇華させていく過程をもはや辿らない。そのような細やかな精神的営為を経ることなく、ただ「耳そぎ」を急ぐのである。したがってその行為の含意も必ずしも明らかにならない。祖師行跡を丁寧な追体験することが「修行」であるならば、彼等「後の語り部たち」は、行状語り部に比しては不肖の弟子というべきかしかない。

考えてみれば、興福寺本「上人伝」や高山寺本「上人物語」は「行状」よりも若干発展した形態を具え、高山寺本「上人伝」はそこから更に変容したものである。宝永刊本などいわゆる「伝記系」明恵伝に繋がる資料群だが、それ

らは、時間の経過にともなうて変質する祖師像を伝えて
るだろう。そして、その変質はとりもおさず高山寺仏教
圏の質的推移の投影である。あるいは、彼等「後の語り部
たち」にとつて大切なものがすでに行状語り部のそれとは
異なつたというようなことがあるのかしれない。実は、論
者は次のようなことを考えている。つまり、後の語り部た
ちほど、「母」の問題が「女人救済」として結実する祖師
の精神営為の過程をじっくりと辿る「修行」よりも、「女
人救済」を積極的に実践する教団というイメージのほうが
大切だったのでないか。そして、彼等がそうせざるを得
ないほどに、その時期、鎌倉新仏教の「女人救済」が急速
な進展を迎えていたのではなかつたか。

◇

◇

たとえば「六角堂懷妊」譚についても、後の語り部たち
の語るところでは、「行状」よりも「母」の存在は希薄で、
むしろ「女人救済」の色彩が濃い。

(23) 其母四条ノ坊門高倉ヨリ六角堂ノ万度マウテヲ企
ツ、其間一万巻ノ観音経ヲヨミテ勤トシテ我カ後生ヲ
タスケ仏弟子トシテ尊トカラム子息ヲ給ラムト祈請ス、
風雨ヲハ、カラス、寒熱ヲイタマス、一心ニ此事ヲ祈
請スルトコロニ……(施無畏寺本・上巻1ウ〜2オ)

同箇所につき諸本の記述を眺めれば、それらは観音の姿
をより鮮明に描出する方向にある。たとえば(24)では

「願ハクハ大慈大悲」と観音に直かに呼びかけるようになつ
ているし、(25)(26)は「女人無知ニシテ」との表現が女
人さえ救済するとして観音の大慈悲を強調することになる。

(26)は「女人ハシ無智ニシテ」と強調がより大きかるう。

(24)亦母六角堂観音詣日経堂遶事万反、其間普門品誦
祈請云、我受難人身雖得女人ハ必人身ヲ失却セン也願
大慈大悲、我後世助程子一人タヘト精誠至祈念(興福
寺本「母尾明恵上人伝」上2オ)

(25)又母六角堂ノ観音ニ詣テ日ヲ遶ルコト万反・
其間普門品ヲ誦ス祈請シテ云・我レ受カタキ人身ヲ得
タリト云トモ・女人無知ニシテ必ス人身ヲ失却セン・
願ハ大慈大悲我後世ヲ助ル程ノ子一人タヒタマヘト精
誠ヲ至シテ祈念ス(高山寺本「母尾明恵上人伝」上1オ
〜ウ)

(26)又母氏者 伝記云又母六角堂ノ観音ニ詣テ日ヲ経
テ堂ヲ巡ル事万反、其間普門品ヲ誦シテ祈請シテ云、
我難受人身ヲ得タリト云トモ女人ハシ無智ニシテ必ス
人身ヲ失却セン、願ハ大慈悲之我後世ヲ助ル程ノ子一
人タヒ給ヘト精誠ヲ至シテ祈念ス(高山寺蔵本「高山
寺明恵上人行状抄」・上2オ)

(27)又母、六角堂の観音に詣で、日を経て堂を繞る事
万遍、其の間、普門品を誦す。祈請して云はく、我れ
受け難き人身を得たりと云へども、女人は無智にして、

必ず人身を失却せん、願はくは大慈大悲、我が後世を
助くる程の子一人給へと祈念す(『明恵上人伝記・宝永
六年刊本・上巻』／興福寺本「上人伝」に一致)

すなわち(23) ↓ (24) ↓ (25) (27) ↓ (26) のよう

に「行状」からの変容が大きくなるが、それに応じて明恵
懐妊と観音との因果をいう度合いが強くなり、また女人救
済の話題が色濃くなっているのである。高山寺仏教圏の展
開に従って、話題の焦点が「母」から「観音」へ、あるいは
「女人救済」へ移っていった跡を見出すことができる。

明恵の諸々を語りはじめるにあたって、行状語り部は「母」
を意識したわけだが、後の語り部たちは「観音による女人
救済」を意識しているといつてもよい。先の仏眼仏母尊の
ことや父母への言及と併せては、後の語り部たちほど、
「女人救済」を積極的実践する教団というイメージを重
視した表れと理解したい。

また、後の語り部たちが語るこのうち、行状語り部の
触れない話題はやはり同様の志向にしたがうものと言えよ
う。ざっと思い出すだけでも、「夢二、先立テ円寂セシ乳
母身肉段々ニ切テ散在セリ、其苦痛ヲヒタ、シク見ヘキ、
此者、平世罪重カルヘキ者ナリシカハ……弥々吉キ僧ト
成テ彼等カ後世ヲモ助クヘキ由(興福寺本「上人伝」3
ウなど)」という亡乳母供養の話や、「乾冷門院御受戒有ル
ヘシトテ上人ヲ請ハレ申シテ……(同30ウなど)」の話など

は、いかにもそれにふさわしげなエピソードを付会したも
のとみることができるといえる。それは、「女人救済」に積極的
に参画しようという祖師像を明確に造形し、それを語る者の
「女人救済」の志向を強調することになる。

このような語り部たちの「語り口の相違」がまさしく当
代仏教界への期待・要請を反映していよう。変質する祖師
明恵像は、高山寺仏教圏の人々が自ら時代的要請により合
致しようとした足跡を照射しよう。彼等が、「女人救済」
にむかつて健闘する祖師像をより強調する必要があるほど
に、当代仏教界の「女人救済」は急速な進展を迎えていた
ということでもある。

※施無畏寺蔵『高山寺明恵上人行状』、上山勘太郎氏蔵『高
山寺明恵上人行状』、高山寺蔵『梅尾説戒日記』、高山寺蔵
『建曆三年正月廿五日夢記』、高山寺蔵『御夢記』、高山寺
蔵『眞聞集』、高山寺蔵『上人之事』、興福寺蔵『梅尾明恵
上人伝』、高山寺蔵『梅尾明恵上人物語』、高山寺蔵『梅尾
明恵上人伝』、高山寺蔵本『高山寺明恵上人行状抄』につ
いては、高山寺典籍文書総合調査団編『明恵上人資料第一
第四』(東京大学出版会)に依った。また各資料の位置づ
けについては、同書の凡例に遵った。

※引用に際しては、同書の読みに遵い、また原則点に従って
私に読み下した。なお句読点を私に補い、紙幅の都合で略
する場合は「……」で示した。

注

(1) 上山勘太郎氏蔵『高山寺明恵上人行状』および紀州施無畏寺蔵『高山寺明恵上人行状』。奥田勲が詳しく述べた(『明恵 遍歴と夢』東京大学出版会一九七八)ように、両書は高弟義林房喜海の「和字之記録」にもっとも近く、明恵伝として古形を保つ。

(2) 明恵とその周辺にあった尼僧たちの活動について、奥田勲の詳しい考証がある。

・奥田勲(一九九七)「明恵と女性―華嚴縁起・善妙・善妙寺」聖心女子大学論叢第八九集

・奥田勲(一九九九)「善妙寺の尼僧―明行・諷誦文をめぐって」聖心女子大学論叢第九二集

また、高山寺仏教圏との関連で次の諸書が示唆に富んだ。
 ・金沢弘(一九七八)『華嚴宗祖師絵伝』成立の背景と「画風」(『日本絵巻大成一七 華嚴宗祖師絵伝』中央公論社)

・大隅和夫・西口順子編(一九八九)『女性と仏教 救いと教え』平凡社

・勝浦令子(一九九五)『女の信心』平凡社

・松尾剛次(一九九八)『新版鎌倉新仏教の成立』吉川弘文館

(3) その人を明恵高弟・義林房喜海とって大過なからうが、施無畏寺本・上山本の成立事情を鑑みて、義林房も含めた明恵側近の面々という意味で「行状語り部」と称しておく。

(4) 高山寺蔵本。寛喜二年八月十五日から十一月三十日まで

で八回にわたって高山寺で行われた明恵の説戒を、高弟・寂恵房長圓が聞き書きしたものの。寛文九年書写。

(5) 高山寺蔵。明恵「夢記」ではないがその「参考資料」として、奥田勲の編・翻刻がなされている。

(6) 高山寺蔵。明恵の弟子隆弁が、祖師講述を筆録したり、また真跡を書写したりして類聚したもの、明恵弟子・仁真の書写本。

(7) 高山寺蔵。明恵弟子・禅浄房が祖師靈異の事績二十条余を記したものの、鎌倉中期写本、著者草稿本かという。

(8) 高山寺蔵。明恵の教訓・談話を、その晩年に近侍した長円が筆録したもの。長円白筆本。

(9) 中世肉刑および「非人救済」について、次の諸書が示唆に富んだ。

・網野善彦・石井進・笠松宏至・勝俣鎮夫(一九八三)『中世の罪と罰』東京大学出版会

・佐藤弘夫(一九八七)『日本中世の国家と仏教』吉川弘文館

・網野善彦(一九九四)『中世の非人と遊女』明石書店

・細川涼一(一九九四)『中世の身分制と非人』日本エディタースクール出版部

・黒田弘子(一九九五)『ミミヲキリハナラソギ 片仮名書百姓申状論』吉川弘文館

・松尾剛次(一九九八)『新版鎌倉新仏教の成立』吉川弘文館

・松尾剛次(一九九八)『中世の都市と非人』法蔵館

(10) 高山寺蔵。「漢文行状」から語句を抄出したうえで主として「明恵上人伝記」の文章などを用いて解説したものである。江戸期の書写。

(ふるた まさのり 群馬大学教育学部助教授)